



倶登山川・改修事業  
住民説明会用資料

## 尻別川の未来を考える オビラメの会

### オビラメの会は、倶登山川を「尻別川のイトウ復元事業」の最初のモデル河川に選びました

尻別川のイトウ（オビラメ）は、いまや絶滅寸前です。いわゆる自然破壊が大きな原因ですが、とくに、オビラメたちが安心して繁殖できる「産卵環境」「稚魚生息環境」が、現在の尻別川流域にはほとんど残っていません。

オビラメの会は2001年から流域をあちこち探し回って、昨年、この倶登山川に、オビラメの稚魚が何とか元気に育つことができるのではないか、という小さな環境を見つけました（表）。

北海道立水産孵化場などの協力を得て詳しく調査を行なったところ、残念ながらやはりここでもイトウは発見できませんでしたが、それを逆手にとって、オビラメの会が人工孵化させた稚魚（親魚は父母とも尻別川産）を活用して、この場所をオビラメの新しい繁

殖場所として復元するための実験を始めることにしました。

そして今年9月、近くにお住まいの農家のみなさま、倶知安町、後志支庁、小樽土木現業所などのご理解をいただき、孵化後約3カ月の稚魚（体長約4センチ）約1800匹を倶登山川流域内の2カ所に放流しました。11月末に行なった追跡調査では、約5センチまで成長したオビラメ稚魚が多数確認され、この環境が稚魚たちにとって住みやすい場所だったことが改めて確認されました。

稚魚たちはこれから成長するにつれ、徐々に川の下流に生息地を移していきます。尻別川本流や河口域でおとなになり、順調にいけば5～6年後、繁殖のためにまたこの倶登山川に上っ

てくると予想されています。

倶登山川には魚道のない堰堤が3つあります。今年放流した稚魚たちが、おとなになってまた戻ってくる5～6年後までの間に、これらの堰堤をオビラメが自由にのぼりおりできるようにしたいとオビラメの会は考えています。オビラメの会は現在、そんな魚道づくりの提案をまとめるべく、勉強会を重ねています。



2004年9月26日、放流翌日のオビラメ稚魚。  
撮影・鈴木芳房氏（オビラメの会会員）

表・オビラメ復活条件と重点河川の状況（倶登山川）

条件	内容	判定	備考
稚魚が生息できる環境がある。	河岸を覆うカバーがある。		ササや草に覆われている。
	浅くて流れのほとんどないワンド状の場所がある。		
親魚が産卵できる環境がある。	瀬と淵の分化が明瞭で平瀬がある（上流すぎず下流すぎず）		
	浮き石状のレキがある（レキ間に泥が堆積していない）		農地からと思われる泥が堆積している。
	レキ径が3cm前後である。		大きささまざまあり。
上下流に自由に行き来できる。	遡上降下の障害物がない。	×	堰堤（土木現業所）が3基ある。
河畔林が発達している。	両岸に連続した河畔林がある。		農地と接する部分には河畔林がない。

総合評価（5段階）..... B 堰堤と泥の問題を解決できれば、稚魚放流河川として有効。

# イトウ稚魚の越冬環境（速報）

おおみや  
大光明宏武（酪農学園大学、オビラメの会）

絶滅の危機に瀕している尻別川イトウの個体群を復元することを目的とし、2004年11月26日～12月11日（実日数13日間）にわたり、稚魚の放流に伴う追跡調査を行なった。

## 調査項目

1. 魚類採捕調査
2. イトウ稚魚捕獲地点の環境計測
3. イトウ稚魚の計測
4. 環境計測

## 捕獲された魚種

アメマス、ウグイ、ヤツメウナギ、フクドジョウ、ハナカジカ、イトウ（放流魚）

## 調査結果の概要

イトウの稚魚は他の多くの魚種に比べ、遊泳力が劣っているため、流速がゼロ、カバーが密にあり、川底には2mm以下の泥のあるところを好み、生息、越冬の場とする。

環境計測の結果、A川の「自然区間」にはこうした環境が比較的多いが、「改修区間」では、ところによってカバーは存在するものの、流速ゼロで泥底（粒径2mm以下）の環境はほとんど存在しないことが分かった。「改修区間」ではイトウ稚魚は1尾も捕獲できなかった。

「改修区間」は護岸のためコンクリートブロックが埋め込まれているだけでなく、流路が直線的で、流木などのカバー材が川底や岸に定着しにくい。そのため流速ゼロの環境が形成されず、稚魚が定位・生息・越冬できる環境がほとんど無いと考えられる。

また「改修区間」には堰堤が存在する。アメマスは辛うじて遡上できるようだが、イトウ親魚には遡上不可能に近い落差があるため、その上流にある産卵可能な場所（「自然区間」）へ到達することはまずできないと考えられる。



イトウ稚魚が好んで定着している場所は.....水深が数センチ～10数センチ。流速はほとんどゼロ。川岸の草本などが水面を覆っていて、川底が泥状の環境（白色の楕円内など）。写真撮影/鈴木芳房氏

いっぽう、親魚が産卵する底質は直径3cmほどの砂利（レキ）だが、A川上流部（「自然区間」）にはこのような砂利底の箇所は点在するものの、近くの畑や工事現場からの泥の流入により、レキの間を泥が埋めてしまっている。また下流部の「改修区間」にはサケ科魚類（イトウを含む）の産卵に適した砂利底の環境は全くない。

今後、イトウ個体群を復元させるためには、イトウをはじめとする魚類の生息や産卵可能な河川環境作りが求められる。

あなたもなれます！

## オビラメ稚魚の追跡調査員

放流したイトウの稚魚たちは、一目で放流魚だと分かるように、すべてアブラビレを切除してあります（アブラビレがなくても稚魚たちの生活に支障はありません）。

とはいえ、放流時の稚魚たちは体長約4センチ、体重約0.6グラム。追跡調査は簡単ではありません。

そこで、尻別川で釣りや川遊びをされるみなさんにも、ぜひご協力をお願いしたいのです。尻別川で小魚を見つけて「イトウかな？」と思ったら、下記のオビラメの会事務局まで、どうぞご一報ください。イトウ稚魚を見分けるための早見版「オビラメ・レスキュー・カード」はオビラメサイトでダウンロードできます。

## ご支援歓迎

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えてお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（5月）までです。概ね1月以内に会員証とニュースレターをお届けします。

年会費2,000円

郵便振替02720-9-11016

加入者名「オビラメの会」

## 「オビラメの会」ニュースレター号外（2004年12月20日発行）

OBIRAME Newsletter EXTRA Dec. 2004

発行	尻別川の未来を考える オビラメの会
編集	平田剛士
印刷・発送	吉岡俊彦
郵便振替	02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
オビラメの会事務局	北海道虻田郡二セコ町富士見65「ライズ」内
	吉岡俊彦 方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472

copyright 2001-2004 Obirame no kai

<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

水と空気、みどりの大自然  
ニセコが好きだ  
楽しんだあとは川を語ろう

御食事処・酒房

# ライズ

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472  
Email / itou110@estate.ocn.ne.jp